高田松原津波復興祈念公園のランドスケープデザイン

Landscape planning and design of Takatamatsubara Memorial Park

篠沢 健太 Kenta SHINOZAWA

工学院大学建築学部まちづくり学科

1. はじめに—私は何をしたのか？

本公園に関する大量の資料と手書きのスケッチを前に、「これを計画設計した」という手応えは、実はない。蘇るのは課題の具現化と解決のために代案を出し調整し続けた記憶である。本稿では、高田松原津波復興祈念公園のランドスケープ計画設計の過程を、同有識者委員会の空間デザインワーキンググループ（以下WGと示す）のとりまとめ役の立場から振り返ってみたい¹⁾。

ランドスケープアーキテクト（以下LAと示す）は建築や都市計画、土木のコーディネータとなる職能であるかのように教育を受けてきた。しかしそれはLAの職能に予め備わっていない。可能性があるだけである。他の分野に認めてもらうところから私の活動は始まったように思う。

2. 空間デザインWGの体制と検討の特徴

専門家が集まりデザインを議論する会議は（通常の会議と異なり）抽象的な議論や概念が飛び交う中それを咀嚼し、議論の前提や共通認識を生み出し、一方で課題に向き合い試行錯誤してその代案を準備しつつ、既成概念やルーチンワークの一步先を目指すことが求められる。本公園の空間WGはそうした会議として運営され、そのことは計画設計にも大きく影響している。

会議は予め委員長の発言台本が用意されているようには運営されていない。それどころか会議の前に知らない間に根回しが済み、ことが決まってしまうことがないようにしていただいた。会議の席で課題が共有され、臨席する学識や専門家はその課題解決に向けて頭を使う…そういう会議はそう多くないと感じるが、そうした前提にも関わらず、国、県、市、道路・河川等多くの関係者の皆さまに会議に出席いただき、会議の席で計画設計の課題が共有された。議論が収束せず、長引くことは当たり前、宿題を持ち帰ることも多々あった。本公園に関わる他委員会のある先生からは「いつもこんなことをやっているのか？」と半ば呆れられたが、それは褒め言葉だったと私は思っている。

こうした会議の運営は、会議の意見に現場がどこまで対応できるか？そのギリギリのラインを豊富な現場での経験

に基づいて見極めてくれた、東北大学災害科学国際研究所平野勝也先生が存在無くしては考えられない。そしてこの会議を「秩序立て」て下さったのは内藤廣先生であった。土木・建築のプロフェッショナルと組んで初めて、ランドスケープの私はWGを運営できた。

3. クライアントは誰か？

経験と実績に劣る私が、LAとしての職能を主張し役割を果たすためにはまず何より国、県、市の方々に認められる必要があった。唯一私ができた／してきたことは、会議の場で共有された課題に応え代案を出し続けることだった…それも通常以上の回転数で。今回の仕事で、私がLAとして果たした役割はコーディネータというよりも潤滑油と言う方が適切かもしれない。

先に会議を「秩序立てる」と述べた。今回の復興支援は、人々に「寄り添う」、善意に基づいたなど自分自身に慢心があるとデザインに「隙」を作りかねないと思ってきた。「被災された方々に失礼がないよう努力をデザインに反映すること」当初学識経験者として参加されていた内藤先生が現場に降り立ってWGに参加する際、この面倒な会議に向き合う皆の姿勢を正して下さった言葉である。この言葉が共有できていなければ、会議の参加者それぞれの正義や正論がデザインを空中分解させてしまう危険もあった。

4. デザインの前提の洗い出しと共有

当初会議で議論されたことの大半は、デザインの前提の洗い出しと共有、その着地点探しであった。例えば本公園における広場は当初、追悼式典の会場として丘の上に設置され、イベント開催時の収容人数が検討された。しかし、3.11冬期に屋外イベントを開催する是非が議論され、一方でイベント開催時の災害発生に対応する丘の広さと収容人数、津波到達高と丘の高さが議論された。さらに丘が最終避難地として適切か？、後に確定された陸前高田市の避難計画における「二度逃げ」に対応すべく丘は形を変えた。

一方、祈念追悼イベントと個人で訪れる方の祈りの質の違い、さらに来訪者の個人属性による祈りの場の違いが、繰り返し議論された。この間、建設が進む堤防の姿は常に

私たちの視野に入っていた。最終的に来訪者の祈りが体験として結実するように広場は形を変えつつ、「祈りの軸」、「海を望む場」²⁾へと結実した。その他、堤防の背面盛土や海岸防災林と公園との関係づけの背景には、常に「堤防を乗り越えて海に向き合う」意思があった³⁾。

土木との前提も変化した。公園北を通る国道45号線は公園計画当初から線形が検討されており、確定するに従い道路と公園境界部のランドスケープ処理、さらにこの区間が「パークウェイ」として整備されるに至っては、公園のランドスケープとリンクした。一方、公園に流入／公園から流出する河川では、すでに多くの区間で災害復旧に伴う改修整備計画が確定し、未改修／検討な可能区間も「災害復旧」として行う工事では被災前の状況に戻すことが前提にあり、できること／できないことが明確であった。

本公園に関わる3つの主体の関係性も、WGで徐々に共有されていった。かつての「市道」の存在は公園整備上扱いが難しかったが、本公園が地元の方々の思いを継承するのに欠かせなかったし、公園内の震災遺構の整備・維持管理における3主体の関係性の整理は長期に及び決定まで時間をかけ慎重に行われた。もちろん整備や管理のために本公園は国、県、市のエリアに区分されたがランドスケープとしては一体不可分と考えるべきだろう。

5. 汽水域のランドスケープとして

本公園は陸と海の境界に位置する。嵩上げされた市街地との間には法面が存在し、堤防で海と隔絶されているが、完全に閉じきってはならず、潮の干満により海水と淡水が混ざり合う「汽水域」のランドスケープである（口絵資料図1-4）。祈りの軸を含む国営公園のエリアは、古川沼に象徴され、気仙川水門によって顕在化される、この乾ききっていない汽水域の環境に包まれている。日々潮の満干を繰り返し、流れと淀みが多様な生態系を育む汽水域の環境のなかで、再びLAとしては、こうした立地での人の関与の在り方を、人工か自然か二分するのではなく、人の関与の疎密を調整し、その手がかりやきっかけをデザインしたに過ぎない（全てを「密」にできない制約もあったが…）。

造園学を学ぶ人なら目にしたことがあるだろう自然に対する人間の営為の基本、「もり Forest- はやし Park- にわ Garden」の概念⁴⁾にあてはめてみると、「にわ」にあたる「追悼の広場」は現在芝生だが、今後の運営方針によっては他の国営公園のように管理された一面の花畑を許容しうのかもしれない。奇跡の一本松に至る園路の途中、かつて復興を支えたベルコンの跡には、植林された海岸防災林の

マツから種子が風散布され「もり」のように自生するかもしれない。古川沼周辺では、被災後に再生・回復した希少な植物種が発見されているが、里山的な「はやし」のように人の関与とともに維持管理されるだろう。この他にも、人々の松原再生の活動は、今後進んでいく県エリアの整備や植樹祭のようなイベントを通じて、堤防を越えて陸と海を、公園と周囲をつないでいこう。こうした可能性は、時間に依存するデザイン⁵⁾と言えないこともないが、終わっていない宿題を前に当事者としては緊張せざるを得ない。変化を受け入れつつ、管理者や市民とともに行われるデザインは始まったばかりである。

6. おわりに一読み解きうるデザイン

高田松原津波復興祈念公園は、堤防を越え海に至る強い「軸線」と、緩い弧を描きながら広域のランドスケープの感覚をもたらす「包摂線」により構成された、デザイン性を重視した公園ととらえられることが多い。それは確かに間違いではないが、初めから机上の理論で描かれたわけではない。多くの紆余曲折、変遷と試行錯誤を通じ獲得されたデザイン…このWGでの仕事は会議のデザイン⁶⁾でもあったし、協働のドキュメンタリでもあった。そのWGの場に立会い、参加できたことにLAとして誇りを持ちたい。そしてまだまだそれは続くのであるということを心しておきたい。

謝辞：最後に、WGに関わってくださった全ての皆さんにお礼を申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) なお計画設計に関する個人的な想いは下記を参照いただきたい。
篠沢健太（2017）：ランドスケープは記念する：建築雑誌 Vol.132, No.1700, 20-21
- 2) 詳しくは本特集の内藤廣先生の寄稿および扉口絵参照。
- 3) この議論の間、「奇跡の一本松」は時を止めた記念碑的存在としてランドマークとなっていたものの、独立した存在であった。
- 4) 高橋理喜男ほか（1986）：造園学：朝倉書店、6-14
- 5) 内藤廣編（2020）：クロノデザイナー—空間価値から時間価値へ：彰国社、223pp
- 6) 最近筆者は「デザインは会議室で生まれる…」とつくづくと考えている。詳しくは忽那裕樹・平賀達也・熊谷玄・長濱伸貴・篠沢健太編著（2021）：図解パブリックスペースのつくり方：学芸出版社、3-4、134-142